

気分状態が原因帰属に及ぼす影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 貴美子, 本田, 真波 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30389

気分状態が原因帰属に及ぼす影響

池上貴美子・本田真波*

Affective influences on causal attribution

Kimiko IKEGAMI and Manami HONDA

問題と目的

1980年代以降、感情と認知との関係が探求され、感情が認知に及ぼす影響の代表的な現象として気分一致効果 mood-congruency effect が注目されてきた。気分一致効果とは、特定の気分が生起すると、その気分の持つ評価的性質（ポジティブ、ネガティブ）に一致する感情価を持つ情報の記憶や判断認知が促進されるという現象である。この現象は、単純な記憶や判断に限らず、気分の良し悪しがあるまま人物の印象形成 (Forgas & Bower, 1987) や、人生満足度 (Schwarz & Clore, 1983) や、商品満足度 (Isen, et al., 1978) などの社会的判断にもみられる (池上, 1997)。このように気分一致効果研究において様々な従属変数を取り上げられる中で、日常生活でおこる原因帰属についてもその気分による影響を詳細に検討することが待たれている。

1 感情が情報処理に及ぼす影響；諸理論

1980年代以降さまざまな気分一致効果の研究が蓄積される中で、1990年代後半以降は感情と情報処理方略との関係に関心が向けられ、感情が認知や情報処理過程に及ぼす影響についての理論やメカニズムが示されてきた。

(1)感情ネットワーク理論

気分一致効果の説明原理として現在最も有力と考えられているのが Bower (1981) による感情ネットワーク理論である (大平, 1997; 谷口, 1998)。感情ネットワーク理論とは、人間の長期記憶内において知識や概念がノード node として表象されており、互いに結合 link して意味ネット

ワークを形成しているという意味ネットワークモデルに、情報ノードを組み込んだものである。これによれば気分一致効果は、ある特定の気分が喚起されるとその情報ノードが活性化し、活性化がそれにリンク知識ノードにも自動的に拡散するために生起する。

このモデルはこれまでの現象の多くを説明できるが、自動的拡散を仮定しているために、ネガティブ気分よりもポジティブ気分においてより気分一致効果が認められやすい一致効果の非対称性を説明できないことや、感情と記憶のネットワークが、人間の全体的な情報処理システムの中に位置づけられていない点が問題とされている (伊藤, 2005)。

(2)感情情報機能説

感情ネットワーク理論が記憶内における知識や感情の発現に注目した説明であるのに対し、Schwarz (1990) は感情状態が対象の評価や判断をする際の手がかりとして利用される側面に注目し、感情情報機能説 feeling as information を唱えた。感情情報機能説では、人が自己の感情状態を、判断の対象や置かれた状況を評価する手がかりとして用いることがあるとし、気分一致効果は、その時の感情状態の原因を、本来の対象とは異なる対象に誤帰属するために生じるとする。

Schwarz らは感情の機能の一つは「反応すべきである、あるいはもはや反応や行動を必要としない」という環境の状態を主体に知らせることとし (大平, 1997)、気分状態についてもこの情報的機能を認め、気分が思考の仕方、特に方略の

選択に及ぼす影響に焦点を当てた「認知的チューニング説」を唱えた。これによればポジティブ気分は状況が問題なく安全であることのシグナルであるため、人は直感的で思いつきやすいヒューリスティックな対処や方略をとることができるという。それに対し、ネガティブ気分は状況が問題をはらむことのシグナルであるため、人は慎重で分析的な思考や方略を選択するという(北村,2004)。

(3)感情混入モデル

池上(1997)によれば、感情ネットワーク理論と感情情報機能説はどちらかが正しいと相反するものではなく、状況によって異なるメカニズムが働いている可能性が強く、これら2つの見方を統合する感情混入モデル *affect infusion model* (Forgas,1995)が提案された。Forgasはこのモデルにおいて、人が社会的判断においてとる方略として次の4種の方略を想定している。

その方略とは、①直接アクセス型方略、②動機充足型方略、③ヒューリスティック型方略、④実質的処理型方略である。このうち①②の方略は感情の影響を受けにくい方略であると考えられている。それに対し③④の方略において感情の影響が見られるとされる。③は利用可能な情報の中からごく一部に注目して判断する資源節約型の処理方略とされ、そのときの感情状態も判断の情報源として利用される。つまり、感情情報機能説に基づいた処理が行われると考えられている。一方、④は新しい情報を、既存の知識と照合したりしながら解釈や統合を行う方略であり、感情ネットワーク理論に従った感情過程が現れると考えられている(池上,1997)。

また感情混入モデルでは認知的チューニング説の観点から、ヒューリスティック型方略はポジティブな感情下で、実質型方略はネガティブな感情下で駆動されやすいと仮定されている(

しかしながら北村(2004)はこのモデルでのForgasの問題意識はあくまでも各方略において気分一致効果が生起するか否かであり、感情の情報処理方略に対する影響に主たる焦点を当て

たものではないことを指摘している。

2 感情が課題遂行に与える影響

ここまで主に感情が情報処理方略の選択に与える影響を概観してきたが、次に、感情が情報処理過程を経た後、実際の課題遂行に及ぼすモデルを取り上げる。

(1) 快樂随伴モデル

これは気分の維持、改善に重点を置いており、このモデルでは、人は常にポジティブ気分を良い状態とし、できるだけポジティブ気分を維持し、ネガティブ気分の際にはそれを改善しようとすると考えられている。Wegenerら(1995)は従来の実験課題の遂行においては、ポジティブ気分群は気分を維持するため認知努力を費やすことを避けたのに対し、ネガティブ気分群では気分を紛らわすため課題に集中したために、結果的に前者ではヒューリスティックな方略が、後者では分析的な方略が選択されたように見えたのだと考えた(北村,2004)。

このモデルに関し、ネガティブ気分の時にはネガティブな画像を避けニュートラルな画像に注意を向けることや、明るいつタイプの画像から影響を受けやすいという報告もある。

(2) 感情の多義的意味; Martinらの主張

北村(2004)によれば、Martinらは感情がもつ情報的意味の内容は状況依存的であるとし、ポジティブ気分時にヒューリスティック処理、ネガティブ気分時に分析的処理が生ずるとは一義的には言えないとした。Martinら(1993)の実験において、続けたいと感じる限り課題を続行するよう言われた条件では、ネガティブ気分群よりもポジティブ気分群のほうが文章を長く読んだのに対し、これでいいと思ったら課題をやめるよう言われた条件下ではネガティブ気分群のほうが課題を長く続けた。

北村(2004)は「感情の情報的意味は、状況と遂行者との間にそのつど構成されている現象であり感情を一つの現象と捉えれば、多義的な意味を有するのは当然であって、それらを感情に一方向的に備わった性質とみなして捉えるのは不適

切である」と、Martinらの主張を支持している。(3)自動的処理と統制的処理の状況的方略モデル SACモデル (Situational Strategies of Automatic and Controlled Processing Model)

北村(2003,2004)は気分状態が情報処理過程あるいは行動に与える影響とその解釈を統合したモデルとして SACモデルを提唱している。このモデルは状況による気分の喚起に始まり、気分の情動的意味の解釈から状況への対応、つまり行動への一連の流れを記述したものである。気分はその意味が状況に応じて解釈されるが、基本的にはポジティブ気分は問題のないこと、ネガティブ気分は問題があることのシグナルであるとする。従って、ポジティブ気分の際には直感的で簡単な思考方略(自動的処理モード)が選択される。これに対しネガティブ気分の場合、誤りが生じることを避けるため、不可避的に生じる自動的反応に対して修正、調整を加えるべく、分析的な方略(統制的処理モード)が用いられる。

さらに統制的処理モードの後には、課題自体が興味を持てるものなのか、続けることが苦痛につながるのかなどの条件により、気分改善という最終目標のためにそのまま注意を課題へ向けるか、課題への注意を辞めるかが選択され、行動へと移る。そして感情は最終的にいつ作業を終了するかなどの手がかり情報をも与える。北村(2003)はこのような感情がもたらす情報をヒューリスティックに利用することで、状況に対するスムーズな対応が取れるとする。

感情の機能を検討する際には、これら様々な知見を理解し結果と結びつけることにより、感情が認知過程に与える影響とその意味が明らかになると考えられる。

3 原因帰属

われわれは日々の生活の中で、自分や他者の振る舞いに対し「なぜそのようなことをするのだろう」とその原因を推測することがある。このように人がある事象を観察したとき、その事象の原因を推論し、事象と原因を結びつけることを Heider(1958)は帰属 attribution と呼んだ。Weiner

ら(1971)は原因帰属の仕方が後の遂行に影響を与える点を教育心理学の文脈で取り上げ、達成場面における成功・失敗の原因として、能力、努力、課題の困難さ、および運の4つの原因を想定した。そしてそれらを、統制の位置 locus of control の次元と安定性 stability の次元を組み合わせることにより示した。統制の位置の次元とはその原因が個人内の要因であるかそれとも個人外の要因であるかという次元であり、安定性の次元とはその原因が時間の経過に対して安定しているものか変化しやすいものかという次元である。

その後 Weinerら(1979)は統制の位置の次元を原因の所在 locus of causality の次元、内在性と改め、新たに統制可能性の次元を追加し、全部で3次元、8つの原因を設定した(竹綱,1996)。

これらの次元は現在では原因帰属研究の主要な測度とされ(Forgas et al.,1990)、我々は試験などの結果について、失敗よりも成功を、また他者に関するよりも自己に関することをより内在的に帰属する傾向があるという。また成功場面と失敗場面に対する原因帰属の仕方には違いがあり(金子,1982)、成功・失敗という結果の違いによって、気分状態が及ぼす影響も異なることが予想される。

3-1 原因帰属スタイル

Abramsonら(1978)は、人が出来事に対してある種の説明を選ぶ習慣的な傾向があるとし、それを「帰属スタイル attribution style」と呼んだ。帰属スタイルは領域限定的 domain specificなものであり、同一人物においても、出来事の正負や領域(例;対人関係、課題達成)毎に異なる帰属スタイルを示すことがあるという(増田,1994)。これよりある人物の帰属スタイルを調べるには、単一の場面だけではなく、複数の場面設定が重要になってくると考えられる。

さらに帰属スタイルが領域限定的であることから、帰属スタイルが気分状態によって影響を受けるとき、その影響も場面ごとに異なることが予想される。そこで本実験では大学生の日常生活におけるアルバイト場面、学業場面、対人場

面を取り上げ、それぞれの場面における原因帰属に気分状態が及ぼす影響を検討する。

3-2 感情と原因帰属

Weiner の原因帰属理論では、成功や失敗の原因をどのように認知するかによって、後の行動に対する期待や喚起される感情が変化し、これらの期待と感情を介してその後の行動が決まると考えられている。奈須(1990)は中学生を対象に、中間試験の原因帰属が、感情を媒介して学習行動、さらには期末試験の成績に影響を及ぼす過程について検討した。その結果、中間試験での失敗を「普段の努力」に帰属するほど後悔の感情が高まり、この後悔という感情が学習行動を促進し、結果的に成績が改善された。

これらの点に関し、Weiner(1979)は彼が分類した原因帰属次元の位置 locus がセルフエスティーム self-esteem に関連する情緒と深い関係があると考えた。

3-3 セルフエスティームと原因帰属

セルフエスティーム(自尊心、自己評価)とは「自己に対する肯定的または否定的態度(Rosemberg, 1965)」で、感情特性の一つであり、人間の様々な行動に影響を与える。増田(1994)によればセルフエスティームと原因帰属は相互関連するとされる。例えば負の出来事の原因が内的で、しかも安定的、普遍的であるときにはセルフエスティームの低下が起こり(Abramsonら, 1978)、セルフエスティームの高低が原因帰属の仕方に影響を与えた。セルフエスティームの高い人が正のフィードバックだけを内的に帰属するのに対し、セルフエスティームの低い人は成功も失敗も内的に帰属する傾向がみられた。

3-4 気分と原因帰属

感情特性であるセルフエスティームと原因帰属の間に相互作用があることが示唆される一方で、気分と原因帰属スタイルの関連については十分な検討がなされていない現状がある。我々は「なんとなく」気分が良いから楽観的な原因帰属をし、「なんとなくむしゃくしゃして」原因を他人に帰属することが日常生活において起こ

りうると想像される。

また感情と認知のメカニズムから、気分が原因帰属スタイルに何らかの影響を与えることが考えられる。例えば、情報機能説の観点から考えると、原因推測時の気分状態をセルフエスティームの上昇や低下に誤帰属した場合、自然な状態よりもセルフエスティームが低くまたは高く誤認され、その後の帰属スタイルに影響を与えることも想定される。また、Bower の感情ネットワーク理論より、ポジティブまたはネガティブな気分が生じられノードの活性化が拡散することにより、よりポジティブなまたはネガティブな帰属が促進されることも考えられる。

3-5 Forgasら(1990)の研究

気分が原因帰属に与える影響を検討した研究として、Forgasら(1990)が挙げられる。彼らは大学生を対象に気分誘導を行った後、設定されたある場面や実際の自分のテスト課題の結果について原因帰属を求める手続きにより、成功と失敗の原因帰属への気分の影響を分析した。その結果、ポジティブな気分では自己の成功を内的に、失敗を外的に帰属する傾向があるのに対し、ネガティブな気分では逆に失敗を自己卑下的に内的に帰属する傾向が高まることが示された。

この実験で原因帰属に対しても気分一致効果が認められることが明らかにされたが、次のような問題点も挙げられる。

(1) 使用測度の問題

この実験では気分が原因帰属に及ぼす影響を調べる測度として内在性と安定性の指標を用いた。具体的な手続きとしては、実験参加者に複数の成功/失敗場面を呈示し、Weiner が始めに唱えた能力、努力、課題の困難さ、運の各4つの原因についてどの程度重要だと思うか7件法で回答を求めた。そして得られた数値を以下のように計算したものを各指標とした。

内在的指標;(努力+能力)-(課題の困難さ+運)
安定性指標;(能力+課題の困難さ)-(努力+運)
これらは重要度の相対的な差を表すものではあるが、著者らはさらに詳細に各原因ごとの変化

の差を分析する。

(2) 課題場面の問題

Forgas ら(1990)は原因帰属課題として Kogan & Wallach(1964)のライフジレンマ場面に成功/失敗の結果を付け加えた文章を課題として用いた。しかしこれらの課題は自己関連性という点において問題があると考えられる。気分一致効果は自己に関する情報処理において認められやすいとされ(伊藤,2005),この実験でとり上げられたライフジレンマの主人公は例えば「ある電気エンジニア」であり,また設定場面も「給料は安いけれど安定している仕事にとどまるか,不安定だけれど高収入の仕事に転職するか迷っている」など大学生にとっては自己関連度が低く,非日常的である。気分一致効果の認められやすさと,実験結果の日常生活への適用との観点から,より身近で自己関連性が高く想像しやすい場면을課題として用いる必要があると考えられる。

さらに,Forgas ら(1990)では原因帰属スタイルが領域限定的であることが考慮されていない。場面による気分状態の影響の違いを検討できるように複数の場面設定を行い,場面ごとに分析することが望ましいと考えられる。

(3) 比較文化的問題

3つめは比較文化的観点より Forgas らの結果を日本人にも適用できるか否かという問題である。北山・高木・松本(1995)は欧米と日本では成功時の原因帰属が異なることを展望している。欧米では自己高揚的帰属 *self-enhancing attribution* が非常に強く認められるのに対し,日本では逆の自己批判・卑下的帰属が顕著に見られるという。自己高揚的帰属とは,望ましい結果を自分自身の内的なものに帰属することであり,そうすることによってセルフエスティームを高め,また,好ましい自己イメージや他者からの信用を得ることができるといえるものである。Bradley(1978)はこのように,人は自分自身の行動や結果について,自己のセルフエスティームを維持し,高揚するような帰属を行う傾向が

あるとしそれをセルフサービング・バイアス *self-serving attribution bias* と呼んだ(荒木,2000)。セルフサービング・バイアスは2種類の帰属に分けられ,そのうちの一つが自己高揚的帰属である。他の一つは自己防衛的帰属 *self-protective attribution* であり,望ましくない結果を自分以外の外的なものに帰属させることである。この帰属により,セルフエスティームが傷つくのを未然に防ぎ,セルフエスティームを維持させることができるという。

これに対し,日本人に顕著とされた自己批判・卑下的帰属とは,成功の原因を外的なものに,失敗の原因を内的なものに帰属する傾向のことである。Kashima & Triandis(1986)は日本人大学生が失敗場面で能力への帰属がより多く,自己批判的傾向が見られたのに対し,アメリカ人学生は成功場面で能力への帰属がより多く,自己高揚的帰属傾向が見られたと報告し,北山ら(1995)が支持される。以上の様に欧米人と日本人では基本的な帰属スタイルが異なるとすれば,気分により受ける影響も異なると予想される。

4 本研究の概要

これまでの議論を踏まえ,本研究では Forgas ら(1990)を参考に日本人大学生を対象に実験を行い,気分状態が原因帰属に対して及ぼす影響を以下のように検討する。

(1)原因帰属課題の場面としてより日常的で身近な自己関連性の高い場面を設定する。日常の3つの異なる場面を比較することにより,場面により気分状態の及ぼす影響の違いを検討する。
(2)帰属次元として内在性・安定性の次元に統制可能性の次元を加えた Weiner(1979)の3次元8項目の帰属の原因を取り上げる。実際問題として,日常生活における原因帰属次元は内在性・安定性の2次元にのみ限定することは困難であり,3次元にすることでより日常的な反応を反映させることが可能になると考えられる。また Forgas ら(1990)が用いた相対的指標は使わず8原因に対する重要度を評定値として扱う。これにより帰属原因の質的变化を検討する。

(3)気分誘導後の原因帰属だけでなく、気分誘導前の自然な状態における原因帰属も併せて測定し、誘導後の群間差だけでなく、誘導前後の群内差についても検討する。気分一致効果の操作的定義の主なものとして伊藤(2005)は次の2つの差を挙げている。それは特定の気分の時にその気分と一致した感情価をもつ情報の認知が、(a)一致しない感情価をもつ情報の認知よりも促進されるという気分誘導群内の差 (b)一致しない気分の時よりも促進されるという気分誘導間の差である。

方 法

実験参加者 大学生計 63 名(平均年齢 19.1 歳, レンジ 19-23 歳)を無作為に以下の2群に振り分けた。ポジティブな気分に誘導されたポジティブ気分誘導群(以下ポジティブ群)35 名, ネガティブな気分に誘導されたネガティブ気分誘導群(以下ネガティブ群)28 名の 2 群を設定。ポジティブ群2名, ネガティブ群3名は気分誘導が十分ではないと判断され分析から除外した。

材料

(1) 原因帰属課題

場面設定 事前調査により日常生活で起こりうる原因帰属を行う場面として, アルバイト場面・学業場面・対人場面の3場面を採用した。Forgas ら(1990)に倣い, それぞれの場面について成功と失敗の2つの結果を用意した。さらに一連の実験の中で同一の実験参加者が気分誘導前・気分誘導後の二度の原因帰属課題を行うことを考慮し, 各場面・結果ごとに代替的な2種の状況を用意した。

すなわち原因帰属課題は場面(アルバイト場面・学業場面・対人場面)×場面結果(成功・失敗)×種類(1・2)の計 12 課題が用意された。

帰属項目 Weiner(1979)の原因帰属理論を基に, 8 つの原因を帰属項目として設定した(Table 1 参照)。具体的には(a)普段の努力, (b)一時的な努力, (c)能力, (d)気分, (e)教師の偏見, (f)他者の日常的でない援助, (g)課題の困難度, (h)運の 8 項目で

あった。ただし, 項目として質問紙に記載する際には, その場面に適したものになるよう必要のものには訂正を加えた。さらに順序による効果を防ぐため, 帰属項目の順序は各場面においてランダム順にした。

Table 1 帰属項目

	統制可能		統制不可能	
	安定的	変動的	安定的	変動的
内的	普段の努力	一時的な努力	能力	気分
外的	他者からの評価	周りからの一時的な援助	課題の困難さ	運

(2) 気分誘導

本研究では音楽による気分誘導を行った。**音楽** 谷口(1998)より, ポジティブ気分を誘導する音楽として, サティ“ピカデリー”, アレインベルグ“森の水車”, シュトラウス二世“喜歌劇「こうもり」より序曲”, シュトラウス“美しき青きドナウ”を, ネガティブ気分を誘導する音楽として, サティ“グノシエンヌ 3 番”, アルビノーニ“アダージョ”, シベリウス“悲しきワルツ”“トウオネラの白鳥”を選択した。ポジティブ気分誘導音楽, ネガティブ気分誘導音楽ともに, 全部で 20 分呈示した。

器具 音楽はそれぞれ CD-R にまとめたものを, CD プレーヤー(Panasonic RX-DT75)で再生した。**気分評定** 気分誘導前と気分誘導後の気分状態を調べるため伊藤(2005)に倣い, 寺崎・古賀・岸本(1991)の多面的感情尺度短縮版の中から典型的な肯定的感情とされる“活動的快”“非活動的快”“親和”と, 典型的な否定的感情とされる“抑鬱・不安”“敵意”“倦怠”を用いた。これらの下位尺度は現在の感情状態について評定するもので, それぞれの感情を表す形容詞5項目から作成されており, 計30項目であった。これら30項目をランダムに並べたものを 2 種類用意し(気分誘導前測定用・気分誘導後測定用), 気分評定用紙とした。

手続き

実験は冊子回答形式で行った。冊子内容は, フェイスシート→練習課題→原因帰属課題 6 問→指示待ち用紙(白紙の下部に「ペンを置き, こ

のページのまま、次の指示があるまでお待ちください。」と印刷されている)→気分評定用紙→指示待ち用紙→気分評定用紙→指示待ち用紙→原因帰属課題 6 問→内観報告用紙の順に構成。

原因帰属課題は冊子にする際、

- ① 気分誘導前と気分誘導後のそれぞれにおいて、アルバイト成功場面、アルバイト失敗場面、学業成功場面、学業失敗場面、対人成功場面、対人失敗場面の 6 場面すべてを含む
- ② 一つの冊子が、同じ種類の課題を重複または欠如することなく全 12 課題全てを含むを考慮し、冊子ごとにランダム順に並べられた。

実験は集団で行われ、各群別々の講義室に集められ、異なる実験者（心理学専攻の 4 年生）により 2 群同時に施行された。実験は以下の順序に従って行われ所要時間は約 30 分であった。

1. フェイスシートの記入
2. 原因帰属課題の練習(1 問)

練習課題として対人失敗場面に類似した場面を取りあげた。

 - ① 場面を示した文章をよく読み、実際に自分の身に起こったことだと想像する。
 - ② その後、そのような場面になった理由として、その下の 8 つの項目がそれぞれの程度重要であるか 7 段階(1. まったく重要でない～7. 非常に重要である)から一つ選ぶことを教示し、練習時間を 1 分設けた。

3. 原因帰属課題(6 問)

全員が練習課題を終えたことを確認した後、本題に移った。実験参加者には「必ず 8 つの項目すべてに答えてから次のページに進んで下さい。問題すべてに答え終わった人は筆記用具を置き、次の指示があるまで待って下さい」と教示した。

4. 気分評定用紙への記入

気分誘導前の参加者の気分状態を測定するため、参加者には「このページには、人の感情や気持ちを表す言葉が並んでいます。それぞれについて、今現在どの程度感じているか、最も近い番号に印をつけて下さい。あまり深く考えず、ありの

ままにお答え下さい」と教示し、各項目について(1. まったく感じていない～6. 非常に感じている)の 6 段階で評定してもらった。

5. 誘導音楽の聴取

ポジティブ群・ネガティブ群でそれぞれ該当する気分誘導音楽を 3 分間聴取させた。目を閉じ、リラックスして音楽を聴くように教示した。音楽はこれから実験終了時まで連続して呈示され、全体で約 20 分であった。

6. 気分評定用紙への記入

3 分経過後、気分誘導後の気分状態を知るために、気分評定用紙への記入を求めた。

7. 原因帰属課題

気分評定用紙への記入が全員終わったことを確認した後、原因帰属課題への回答を求めた。

8. 内観報告用紙へ内観を記入

結 果

気分評定

伊藤(2005)に倣い各尺度の気分評定値の平均値を気分得点とした。肯定的感情の尺度(“活動的快”“非活動的快”“親和”)においては高得点ほどポジティブな感情を感じており、否定的感情の尺度(“憂鬱・不安”“敵意”“倦怠”)では、高得点ほどネガティブな感情を感じているということになる。各尺度の気分得点において実験参加者全体の平均から $\pm 2SD$ 以上の逸脱がみられたデータは、以下の全分析から除外した(ポジティブ群 2 名、ネガティブ群 3 名)。

さらに、肯定的感情尺度および否定的感情尺度の平均得点について、感情価別に、誘導気分(ポジティブ群、ネガティブ群：被験者間要因)×測定時期(気分誘導前、気分誘導後：被験者内要因)の 2 要因分散分析を行った。肯定的感情では誘導気分×測定時期の交互作用が有意で($F(1,56)=9.405, p<.005$)、単純主効果の検定より、両群において気分誘導前後に差が見られ、ポジティブ群では誘導前<誘導後であったが、ネガティブ群では誘導前>誘導後であった。すなわち、ポジティブ群は誘導前より気分誘導後に肯

定的感情をより強く感じるようになり、ネガティブ群は誘導前よりも後では肯定的感情を感じなくなった。

否定的感情については測定時期の主効果と誘導気分×測定時期の交互作用が有意であった

($F(1,56)=29.945, p<.001$; $F(1,56)=4.149, p<.05$). 単純主効果の検定より、ポジティブ群、ネガティブ群ともに誘導前>誘導後であったが、ポジティブ群のほうがその差が大きかった。つまり、気分誘導により両群とも否定的感情を感じにくくなったが、ネガティブ群よりもポジティブ群のほうがより否定的感情を感じなくなった(Fig.1).

さらに詳しく感情尺度ごとに平均値について誘導気分(ポジティブ群、ネガティブ群:被験者間)×測定時期(気分誘導前、気分誘導後;被験者内)の2要因分散分析を行った。“活動的快”では誘導気分×測定時期の交互作用が有意で($F(1,56)=20.450, p<.001$)単純主効果の検定より、誘導前では差がないが、誘導後ではポジティブ群>ネガティブ群であった。またポジティブ群においてもネガティブ群においても測定時期による差がみられポジティブ群では誘導前<誘導後であったのに対して、ネガティブ群では誘導前>誘導後であった。“非活動的快”では測定時期の主効果が有意($F(1,56)=4.081, p<.05$)で、全体的に誘導前<誘導後であった。

否定的感情の尺度である“抑鬱・不安”“敵意”“倦怠”において測定時期の主効果がみられ($F(1,56)=18.583, p<.001$; $F(1,56)=4.465, p<.05$; $F(1,56)=21.068, p<.01$), どの尺度においても誘導前>誘導後であった。ここであえて尺度ごとに測定時期を要因とする1要因分散分析を行ったところ、敵意についてポジティブ群では前後に有意差があったが、ネガティブ群では差が見られなかった。

以上よりポジティブ群においては気分誘導前よりも気分誘導後においてより肯定的感情を感じ、否定的感情を感じていなかった。一方、ネガティブ群では気分誘導前よりも気分誘導後においてより肯定的感情を感じなくなった。否定的

感情についてはポジティブ群同様気分誘導後のほうがより感じにくくなっていたが、ポジティブ群ほどの前後の差はみられなかった。全体としてそれぞれ群内では意図した気分に変化したといえる。

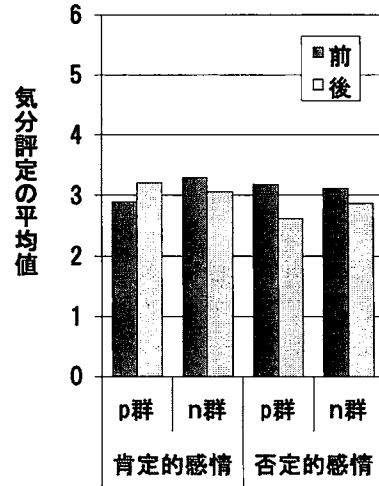


Figure 1. 各群における感情価別および評定期別別の感情得点の平均値

原因帰属課題

Forgas ら(1990)を参考に気分誘導後の原因帰属についてポジティブ群とネガティブ群の間に群間差があるか検討し、次に各群において気分誘導前後で群内差があるか否かを検討した。気分誘導後の群間差も、各群における気分誘導前後の群内差も項目ごとに分析を行った。

本研究で用いた帰属原因(項目)に関してはTable 1の通りであった。

(1) アルバイト場面

① 気分誘導前後における原因帰属の群間差

項目ごとに、場面結果(成功・失敗;被験者間)×誘導気分(ポジティブ群・ネガティブ群;被験者間)の2要因分散分析を行った。

その結果、「一時的努力」において場面結果×誘導気分の交互作用がみられ($F(1,54)=4.363, p<.05$), 単純主効果の検定より成

功場面においてポジティブ群がネガティブ群より一時的努力を重要視した。また「他者からの評価」において、場面結果×誘導気分の交互作用の傾向が見られ($F(1,54)=2.846, p<.10$)、単純主効果の検定より、ネガティブ群がポジティブ群より他者からの評価を重要視した。全体的に「運」において誘導気分の主効果がみられ($F(1,54)=4.493, p<.05$)、ネガティブ群がポジティブ群よりも運を重要視した。つまり、ポジティブ群は成功場面で一時的努力を重要と認め、ネガティブ群は失敗場面において他者からの評価を重要視した。またネガティブ群はポジティブ群よりも運を重要視した。

②分誘導前後における原因帰属の群内差

各項目の得点について、場面結果(成功・失敗; 被験者間)×誘導気分(ポジティブ群・ネガティブ群; 被験者間)×時期(気分誘導前・気分誘導後; 被験者内)の3要因分散分析を行った。気分誘導後、ポジティブ群は失敗場面、「課題の困難さ」において、場面結果×誘導気分×時期の交互作用が見られ($F(1,54)=3.412, p<.10$)、重要度が気分誘導前よりも後で上昇した。ポジティブ群は全体的に「一時的努力」において、気分×時期の交互作用がみられ ($F(1,54)=7.471, p<.05$)、誘導前よりも後で重要度が上昇傾向にあった。ネガティブ群は失敗場面で「普段の努力」において交互作用が見られ($F(1,54)=4.341, p<.05$)、気分誘導後には重要度が低下した。

このようにアルバイト場面において、ポジティブ群は努力をより重要視するようになり、荒木(2000)が指摘する日本の社会の価値観を表す「努力の重視」を示した。またネガティブ群はポジティブ群よりも「運」を重要視するようになり、成功・失敗に限らず、自己関与が低い無気力・投げやりな態度を示したといえる。

(2) 学業場面

①気分誘導前後における原因帰属の群間差

アルバイト場面と同様の手順で分析を行った。その結果、全体的に「能力」と「他者からの評価」で主効果があり ($F(1,54)=6.078, p<.05$;

$F(1,54)=5.564, p<.05$)、ポジティブ群がネガティブ群より能力と他者からの評価を重要視した。成功場面において、「周囲の一時的援助」に交互作用の傾向が見られ($F(1,54)=3.120, p<.10$)、ネガティブ群よりもポジティブ群がより重要し、失敗場面において「課題の困難さ」に交互作用の傾向が見られ($F(1,54)=3.161, p<.10$)、ポジティブ群がネガティブ群よりも課題の困難さを重要視する傾向を示した。

②気分誘導前後における原因帰属の群内差

同様の分析から、気分誘導後のポジティブ群においては「周囲の一時的援助」を失敗場面より成功場面で重要視した。ネガティブ群においては失敗場面で、「周囲の一時的援助」の重要度が増加し、全体的に「能力」の重要度が減少した(結果の主効果 $F(1,54)=4.127, p<.05$; 課題遂行時の主効果 $F(1,54)=7.266, p<.05$)。ポジティブ群では他者の存在を重要視するようになり、ポジティブ感情が自己評価と自己確信の高揚により外界へ注意が向けられると主張する Sedikides(1992)を支持する方向となった。またポジティブ群は課題の困難さへ、ネガティブ群は周りからの一時的援助へと両群とも自己防衛的帰属を行った。

(3) 対人場面 他の場面と同様の分析を行った。

①気分誘導前後における原因帰属の群間差

ネガティブ群において「気分」の重要度に結果×誘導気分の交互作用($F(1,54)=3.808, p<.10$)の傾向がみられ、成功よりも失敗場面で気分はより重要視された。失敗はネガティブ気分によるもので、「一時的努力」をすることで他者からの評価を良くし、成功へ導こうとする表れか、ネガティブ気分によってもたらされる対人場面の危機を回避することが示唆された。

②気分誘導前後の原因帰属の群内差

気分誘導後ネガティブ気分においては全体的に「一時的努力」において、誘導気分×時期の交互作用が見られ($F(1,54)=5.210, p<.05$)、重要度が誘導後に増加した。また成功課題の「他者からの評価」において、結果×誘導気分×課題遂行の交

相互作用の傾向が見られ($F(1,54)=3.584, p<.10$)ネガティブ群がポジティブ群よりも重要視した。

全体的に対人場面は気分の影響を受けにくいことが示され、友人関係領域の原因帰属の仕方が絶望感や孤独感、シャイネスと関係が深いとする櫻井(1991)を支持する方向であった。

考 察

1. 気分誘導

ポジティブ群、ネガティブ群各群における感情価の比較より、気分誘導によってポジティブ群は誘導前より肯定的感情を感じ、否定的感情を感じなくなっていたことが示された。これに対し、ネガティブ群は誘導前よりも肯定的感情を感じなくなっていた。否定的感情も誘導前に比べると感じなくなっていたが、ネガティブ群における誘導前後の差はポジティブ群における誘導前後の差より小さかった。以上より概ね実験者が意図した気分誘導がなされ、両群は異なる気分状態であったと考えられる。

2. 気分が原因帰属に及ぼす影響

原因帰属に関して、Abramsonら(1978)は「帰属スタイルは領域限定的なものであり、同一人物でも出来事の正負や領域ごとに異なる帰属スタイルを示すことがある」と主張した(増田,1994)。気分状態が原因帰属に及ぼす影響も領域ごとに異なる可能性が示唆されることから各場面に分けて考察を行うこととする。

(1) アルバイト場面

気分誘導後のポジティブ群とネガティブ群を群間比較した結果、誘導気分の主効果や、誘導気分を含む交互作用が見られたもののうち、気分誘導によると考えられる変化は、アルバイト場面の「一時的努力」「他者からの評価」「運」においてみられた。具体的には、誘導後のポジティブ群とネガティブ群を比較すると、アルバイト場面の成功場面でポジティブ群はネガティブ群より「一時的努力」を重要視し、ネガティブ群はポジティブ群より「運」を重要視した。また失敗場面においてネガティブ群はポジティブ群

よりも「他者からの評価」や「運」を重要視した。またアルバイト場面では成功や失敗の原因として、ネガティブ群はポジティブ群よりも「運」を重要視した。

ポジティブ群、ネガティブ群それぞれにおける気分誘導前後の評定値の群内比較では、アルバイト場面において「普段の努力」「一時的努力」「課題の困難さ」の重要度の変化がみられた。具体的にはポジティブ群は全体的に誘導前よりも誘導後に「一時的努力」の重要度が増加した。また失敗場面でポジティブ群は「課題の困難さ」が増加し、ネガティブ群では「普段の努力」の重要度が低下した。

以上より、本研究のアルバイト場面においては、気分誘導によりポジティブ群はより「一時的努力」を重視するようになり、ネガティブ群は失敗において、より普段の努力を重視しなくなったといえる。

荒木(2000)は、日本の社会全体の価値観を反映していると考えられるものとして「努力」の重視を挙げている。荒木(2000)によれば、我が国の学業達成場面では、成功や失敗にかかわらず一生懸命努力すればよい結果が得られると一般的に考えられるという。つまり、原因として努力を重視することは日本の社会の価値観に適応した帰属であり、本実験において、アルバイト場面ではポジティブ気分は日本人としてより適応的な帰属を促進し、ネガティブ群においてはそのような帰属が抑制されたと推察できる。

アルバイト場面に限らず全体的な傾向として普段の努力と一時的な努力の両方が同程度重要視されているのも、この「努力の重視」によると考えられる。またポジティブ群で失敗に関して、「課題の困難さ」で重要度が高まったのは、失敗を外的なものに帰属する自己防衛的帰属の表れであると考えられる。Kitayamaら(1997)は日本人学生がアメリカ人学生に比べ、成功場面においてセルフエスティームが高まる程度よりも、失敗場面においてセルフエスティームが低下する程度の方がはるかに大きいことを報告している。

人は常にポジティブ気分をよい状態とし、できるだけポジティブ気分を維持し、ネガティブ気分の際にはそれを改善しようとするものである(Wegenerら,1995)と考えると、ポジティブ群は失敗によりセルフエスティームが低下しポジティブ気分が損なわれるのを避けるため自己防衛的帰属がみられたと考えられる。

さらに気分誘導後、ネガティブ群においては成功・失敗によらず全体的にポジティブ群よりも運への帰属が高くなることが示された。失敗の外的なものへの帰属はセルフサービング・バイアスの自己防衛的帰属にあたり(荒木,2000)、自己のセルフエスティームが傷つくことを防ぐ適応的な帰属であると考えられる。成功の場合も同様に運に帰属させる場合は、一概に適応的であると言えないのではないかと考える。成功であっても失敗であっても、不安定で外的で統制不可能な運に帰属する態度は適応的というよりも、達成結果に無関心で無気力・投げやりな程度であると考えられるのではないだろうか。ネガティブ気分がこのような態度を促進した可能性を考えると、ネガティブ群の失敗において他者からの評価の重要度が増加したのは、失敗の原因を他者に転嫁するというネガティブな意味合いを持つのではないかと推察される。

(2)学業場面

学業場面の気分誘導後のポジティブ群とネガティブ群の群間比較の結果、気分誘導による変化は、「周りからの一時的な援助」「能力」「他者からの評価」「課題の困難さ」であった。具体的には、ポジティブ群がネガティブ群よりも成功場面において周りからの一時的援助を重要視した。また気分誘導後、ポジティブ群はネガティブ群よりも能力や他者からの評価を重視する傾向が全体的にみられたが、特に失敗場面において大きな差が見られた。この差は能力に関してはネガティブ群が気分誘導によって誘導前よりも能力を重要視しなくなったためであり、他者からの評価に関してはポジティブ群が気分誘導によって誘導前よりも重視するようになったため

であると考えられる。またポジティブ群はネガティブ群に比べ、失敗を課題の困難さに帰属することが示された。

一方、気分誘導前後の群内比較の結果のうち気分誘導によると思われる変化がみられたのは、学業場面における「周りからの援助」と「周りからの一時的援助」であった。具体的には気分誘導前後の群内比較では、ポジティブ群は誘導前に比べ、誘導後で周りからの一時的援助の重要度が失敗よりも成功場面で高かった。ポジティブ群は誘導後に失敗よりも成功で周りからの一時的援助を重要視すること、ネガティブ群は失敗について気分誘導前よりも気分誘導後に他者からの一時的援助に帰属することが示された。

ポジティブ群で失敗場面において課題の困難さの重要度が高くなったこと、成功場面において周りからの一時的援助の重要度が高くなったことは、ポジティブ群においてはセルフサービング・バイアスに加え、成功における他者の存在への帰属が行われたことを示唆した。

つまり、ポジティブ気分は失敗を課題の困難さという外的なものに帰属する自己防衛的帰属に加え、成功は内的なものだけでなく、他者の存在のおかげであるとの認知を促すと考えられた。Forgasら(1990)ではポジティブ群で確認されたのは前者の傾向のみであった。

ポジティブ群が他者の存在をより重要視するようになったことは、Sedikides(1992)と一致すると考えられる。Sedikidesはポジティブ感情とネガティブ感情が生じた場合では注意の向けられる方向が違い、ネガティブ感情は自己評価と自己確信の低下を引き起こし、自己に対する注意を高めさせるのに対し、ポジティブ感情は自己評価と自己確信の高揚により注意を外界に向けさせるという(池上,1997)。これを踏まえると、ポジティブ群では学業場面の成功によってセルフエスティームが高揚したために外界への注意が促され、他者志向傾向が見られるようになったと考えられる。一方、ネガティブ群では学業場面の成功において他者志向傾向が見られなかった

ことから、ネガティブ気分によって成功によるセルフエスティームの高揚が阻害された可能性が示唆される。また、ポジティブ気分において失敗について自己防衛的帰属が見られたことは、アルバイト場面と同様にポジティブ気分を維持するためであることが推察される。

一方、ネガティブ群は気分誘導後、失敗場面で周りからの一時的援助をより重視するようになったのに対し、能力への重要度の認知が低下した。ポジティブ群と同じく自己防衛的帰属が行われたと考えられる。ネガティブ群においては、失敗によりセルフエスティームが低下し、よりネガティブな気分になるのを避けるため、気分状態の維持・改善を目的に自己防衛的帰属が行われたのではないかと考えられる。

(3)対人場面

気分誘導後の群間比較の結果、対人場面では能力、運、気分において、気分誘導による変化が見られた。具体的には対人場面ではネガティブ群において成功より失敗に関して「気分」の重要度が高かった。

気分誘導前後の群内比較ではネガティブ群で、全体的に、「一時的努力」の重要度が増加した。また気分誘導後の成功に関して、ネガティブ群はポジティブ群よりも「他者からの評価」をより重要視していた。

以上より対人場面においてネガティブ気分は成功に関して他者からの評価と気分への重要度の認知を増加させ、また成功失敗によらず一時的努力への重要度の認知を増加させたといえる。これはネガティブ群においてネガティブ気分の改善が行われたことを想定させる。対人場面においてネガティブ気分であることは、相手への印象が悪くなると予想され、より善い関係を結ぶにはネガティブ気分の改善がなされることがより好ましいと思われたと考えられる。成功の原因としては自らの気分よりも相手からの評価が重要であり、努力次第でより良くなると認知することでネガティブ気分を減少させ、ポジティブ気分を生じさせようとしたと考えられる。

(4)まとめ

本研究ではForgasら(1990)を参考に、気分状態が原因帰属に及ぼす影響について実験を行い次の点を明らかにした(池上・本田,2009)。

まず始めに、Abramsonら(1978)の「帰属スタイルは領域限定的である」を受けて、気分状態が原因帰属に及ぼす影響も場面によって異なることが予想された。これはForgasら(1990)では扱われなかった点である。本研究では「日常でも起こりうる場面」としてアルバイト場面、学業場面、対人場面、の3場面を取り上げが、その中でも対人場面において気分の影響があまり見られなかった。この点に関して櫻井(1991)は大学生を対象に調査を行い、友人関係場面の帰属スタイルの方が学業達成場面の帰属スタイルより絶望感、孤独感、シャイネスと関連が深いことを示している。これらの感情は不適応的であり、避けるべきものである。そこで、対人場面においてはそのような感情に陥ることのないよう慎重な帰属が行われたために、気分状態による影響を受けにくかったと推察される。

次にWeiner(1972,1979)の2次元ないし3次元の捉え方について先行研究が必ずしも適切ではないことが示唆された。例えばForgasら(1990)は各帰属の重要度を原因ごとに絶対値として評定を求めているものの、解釈の際には「内的対外的」「安定性対不安定性」のように、重要度が次元のどちらかに偏る、または中立となることを想定している。また村上(1989)による「原因帰属スタイル測定尺度」でも同様に、内在性や統制可能性の次元がそれぞれ数直線上の両端に位置することが想定されている。これに対し本研究では各原因ごとにそれぞれの絶対的評価の回答を求めデータとした。その結果、誘導気分によらず全体的な傾向として、普段の努力と一時的努力の両方が同程度に高く重要視されることが分かった。つまり、安定的なものも不安定なものも両方とも重要視されることが示されたのである。

次元を数直線的に捉えるだけではこのような

傾向を捉えることを見落とす可能性もあると考えられる。今後の原因帰属研究においても帰属原因の捉え方に関し、各次元内での相対的な解釈に加へ、各原因の絶対的評価を検討することは帰属スタイルの質的側面を解明するために有効と考えられる。

また、ポジティブ群・ネガティブ群ともに失敗を外的なものに帰属する自己防衛的帰属が見られた。さらにこれに対し成功を内的なものに帰属する自己高揚的帰属は認められなかった。この結果は北山・高木・松本(1995)や Kitayama ら(1997)と一致する。日本人の特徴として、失敗場面においてセルフエスティームが低下しやすいことが考えられるため、ポジティブ群では気分状態を維持するため、ネガティブ群では気分状態を維持・改善するため、セルフエスティームの低下を避けるべく自己防衛的帰属が取られたのではないだろうか。

最後に、本研究において見られた結果が、問題で挙げた感情が認知や行動に及ぼす様々なモデルのうち、どのモデルにより適合するか考察する。ポジティブ群では気分状態を維持するように、ネガティブ群では気分状態を維持さらには改善する傾向がみられたことは、Wegener ら(1995)の快樂随伴モデルにあてはまると考えられる。一方ネガティブ気分状態によってよりネガティブな帰属が促進したのも認められ、こちらに関しては Bower(1981)の感情ネットワーク理論によって解釈されると考えられる。

池上(1997)は感情ネットワーク理論と感情情報機能説について、この2つはどちらかのみが正しいと相反するものではなく、「状況によって異なるメカニズムが働いている可能性が強い」と述べる。本研究結果は状況によって、その2つのモデルのみでなくこれまで提起された複数のモデルが組み込まれうる可能性を示しているといえる。その意味で、感情がもつ情報的意味の内容はきわめて状況依存的であるとする Martin ら(1993)の主張が注目される。

参考文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. 1978 Learned helplessness in humans; Critique and reformulation. *Journal of abnormal psychology*, 87, 49-74. (増田, 1994 より).
- 荒木友希子 2000 原因帰属に関する研究の諸問題 社会環境研究 5, 139-151.
- 蘭千壽 1992 原因帰属 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編)『セルフ・エスティームの心理学』ナカニシヤ出版
- Arkin, R. M. & Maruyama, G. M. 1979 Attribution, affect and college exam performance. *Journal of educational psychology*, 71, 85-93 (Forgas et al., 1990).
- Bower, G. H., 1981a Mood and memory. *American psychologist*, 36, 129-148. (伊藤, 2005 より)
- Bower, G. H., Gilligans, S. G., & Monteiro, K. P. 1981b Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental psychology: general*, 110, 451-473. 伊藤, 1999 より)
- Bradly, G. W. 1978 Self-serving biases in the attribution process: A reexamination of the fact or fiction question. *Journal of personality and social psychology*, 36, 56-71. (荒木, 2000 より)
- Forgas, J. P., Power, G. H. 1987 Mood effects on person-perception judgments, *Journal of personality and social psychology*, 53, 53-60. (池上, 1997 より)
- Forgas, J. P., Power, G. H., & Moylan S. J. 1990 Praise or blame?: Affective influences on attribution for achievement *Journal of personality and social psychology*, 59, 809-818.
- Forgas, J. P. 1995 Mood and judgment; The affect infusion model (AIM). *Psychological Bulletin*, 117, 39-66. (池上, 1997 より)
- 福野光輝 2005 感情と社会的認知 畑山俊輝(編著)『感情心理学パースペクティブ—感情の豊かな世界—』北大路書房 p11-18.
- Heider, F. 1958 The psychology of interpersonal relations. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 『対人関係の心理学』誠信書房)
- 池上貴美子・本田真波 2009 気分状態が原因帰属に及ぼす影響 日本心理学会第73回大会発表論文集 101.
- 池上知子 1997 社会的判断と感情 海保博(編著)『温

- 「かい認知」の心理学—認知と感情の融接現象の不思議—』金子書房 99-122
- 伊藤美加 2000 気分一致効果をめぐる諸問題 気分状態と感情特性—心理学評論 43, 368-386.
- 伊藤美加 2005 『感情状態が認知過程に及ぼす影響—気分一致効果を巡って—』風間書房
- Izen, A.M., Shalke, T.E., Clark, M.S., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory and behavior; A cognitive loop? *Journal of personality and social psychology*, 36, 1-12. (池上, 1997 より)
- Jones, S. C., 1973 Self and interpersonal evaluations; Esteem theories versus consistency theories. *Psychological bulletin*, 79, 185-199. (増田, 1994 より)
- 金子智栄子 1982 原因帰属尺度構成に関する研究 教育心理学研究 30, 227-232.
- Kashima, Y., & Triandis, H. C. 1986 The self-serving bias in attributions as a coping strategy; A cross-cultural study. *Journal of cross-cultural psychology*, 17, 83-97 (荒木, 2000 より).
- 北村英哉 2002 ムード状態が情報処理方略に及ぼす効果—ムードの誤帰属と有名さの誤帰属の2課題を用いた自動的処理と統制的処理の検討— 実験社会心理学研究 41, 84-95.
- 北村英哉 2003 『認知と感情』ナカニシヤ出版
- 北村英哉 2004 認知と感情 大島尚・北村英哉(編著) 『認知の社会心理学』北樹出版 108-130.
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の起因：日本的自己の文化心理学 心理学評論 38, 247-280.
- 奈須正裕 1988 Weiner の達成動機づけに関する帰属理論についての研究 教育心理学研究 37, 54-63.
- 村上裕恵 (1989) 状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 29, 25-32.
- 大平英樹 1997 認知と感情の融接現象を考える枠組み 海保博之(編著) 『「温かい認知」の心理学』金子書房 9-36
- 櫻井茂男 1991 社会的不適応に関する原因帰属モデルの検討 日心 55 回論文集 444.
- Schwarz, N. 1990 Feeling as information: Informational and motivational function. In E.T.Higgins & R.M.Sorrentino (eds.) *Handbook of motivation and cognition; Foundations of social behavior*. vol. 2. N.Y.: Guilford Press. Pp527-561 (北村, 2002 より)
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1983 Mood misattribution, and judgments of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of personality and social psychology*, 45, 513-523. (池上, 1997 より)
- Sedikides, C. 1992 Mood as a determinant of attentional focus. *Cognition and emotion*, 6, 129-148. (池上, 1997 より)
- 高橋雅延・谷口高士 2002 『感情と心理学』北大路書房
- 竹網誠一郎 1996 動機づけ 大村彰道(編) 『教育心理学 I』東京大学出版会 149-167.
- 谷口高士 1998 『音楽と感情』北大路書房
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情尺度の作成 心理学研究 62, 350-356.
- 筒井美加 1997 自己関連語における気分一致効果 心理学研究 68, 25-32.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of educational psychology*, 71, 3-25(竹網, 1996 より)
- Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, I., Rest, S. & Rosenbaum, R. M. 1971 Perceiving the causes of success and failure. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. H. Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins & B. Weiner (eds.) *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. General learning press. (竹網, 1996 より)
- Weiner, B. 1985 An attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological review*, 92, 548-573(竹網, 1996 より).
- Wegener, D.T., Petty, R.E., & Smith, S.M. 1995 Positive mood can increase or decrease message scrutiny; The hedonic contingency view of mood and message processing. *Journal of personality and social psychology*, 69, 5-15(北村, 2004 より).